

コメン ト 3

—— 第三のレクイエム ——

中 牧 弘 允*

関一敏さんのコメントで「矛盾」の問題が取り上げられましたが、それを受ける形ではじめたいと思います。「矛盾」という言葉は50年ほど前までは弁証法との関連で学生も教師もよく使っていました。「アウフヘーベン」は「矛盾」をより高いレベルで超克するという意味で「止揚」などと訳されていました。もともとヘーゲル哲学に由来する概念ですが、マルクス主義がその普及に一役買っていたことは言うまでもありません。しかし、いまでは「アウフヘーベン」はほとんど死語となってしまいました。

高取正男先生が「アウフヘーベン」という用語を使った例を知りませんが、当時の知識人の常としてマルクス主義の影響を陰に陽に受けていることはごく自然のことだったと思います。それゆえ、もうひとつの「矛盾」という概念に関しては、高取先生もたえず意識していたのではないのでしょうか。というのも、『神道の成立』を読んで日本民族学会の機関誌『民族学研究』（第44巻第4号、1980年）に書評を書いたとき、わたしは二つのモデル図を使って高取説を説明しようとしたのですが、そこに介在していたのは「矛盾」でした。もっとも、それは高取先生が標榜するところの「矛盾」ではなく、わたしが提示しようとした「矛盾」です。

図1は年月日のない「成立」にかかわるモデルです。神道を目的意識的／自然成長的、組織的／民俗的という二項対立でとらえ、その中間のあいまいな領域に高取先生は注目していたという理解です。それは「教団としての神道」と「習俗としての神祇信仰」の間にはさまれた「意識的な神祇信仰」とでもいうべき領域です。高取説は二項対立の中間に「矛盾」を孕んだ、どちらとも言えない領域を想定していた点でユニークであったというのがわたしの指摘です。

「宗教以前」とか「芸能未発」というような考え方につながると思われるのが、曖昧模糊とした中間領域かと思います。それがおそらく歴史民俗学が開拓すべき領域であり、「仮想敵」と目される黒田俊雄のマルクス主義歴史学ときびしく対峙する視点ではなかったでしょうか。

* なかまき ひろちか 吹田市立博物館

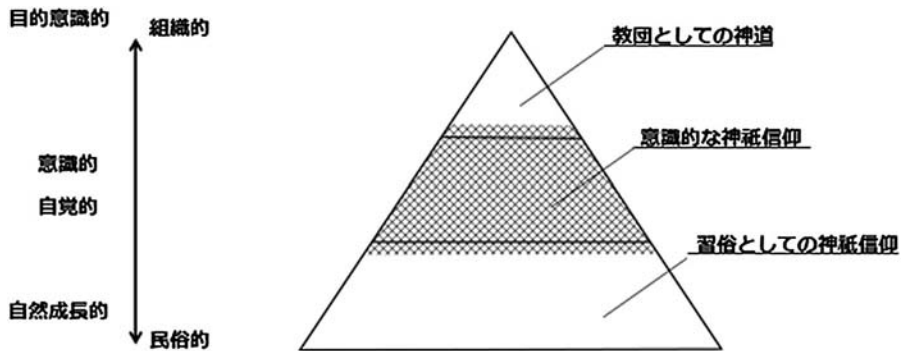


図 1

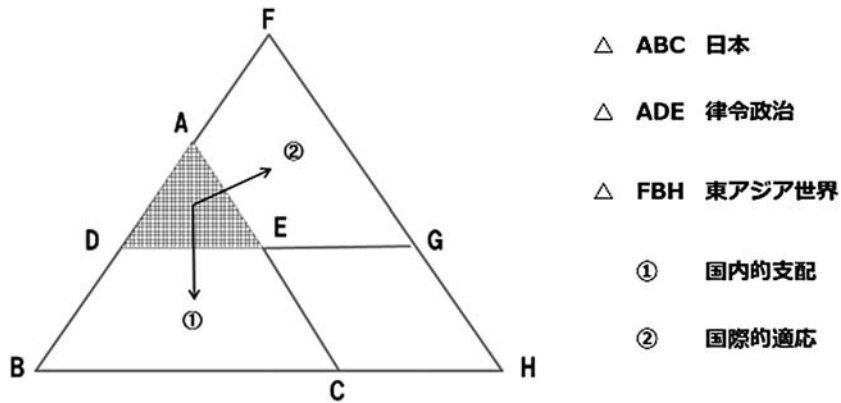


図 2

図 2 は隋・唐を中心とする古代東アジア世界において日本がいかなる位置を占めていたかを示すモデルです。高取先生は隼人の吠声^{べいせい}をとりあげ、「国内に対しては権勢の誇示として効果絶大でも、ほかならぬその律令朝廷が適応しようとしていた国際社会からは、朝廷自身の異端と蛮風をあらわにするとみられ、蔑視されると考えられていたのだろうか」と述べています。その二つの課題を「矛盾」ととらえれば、①のベクトルの局面では神道が、②のほうでは仏教や儒教が重視されたと把握することができるでしょう。このモデルは滝村隆一の「第 3 権力論」(『マルクス主義国家論』三一書房、1971 年)のモデルを変形して作成したものです。

図 1 にしろ、図 2 にしろ、斜線部分が矛盾をはらんだ領域で、高取先生が解明しようとしたことの意義は大きいと思います。

ここからは多少私事にわたりますが、高取先生とわたしの関係について述べてみたいと思います。

1977 年、国立民族学博物館に客員部門が設けられ、高取先生は非常勤講師のような形で毎

週月曜日、民博に通勤されてきました。わたしも同年4月、新米の助手として採用され、高取先生とは時々顔を合わせる関係になりました。とはいえ、その年はハワイの日系宗教の調査で夏の3ヵ月間は館を留守にしていたこともあり、先生と親しく話をした記憶はあまりありません。ただ、東大宗教学研究室の教授をつとめていた堀一郎先生の本は何を読んだかと問われたことがあります。

その年の11月に民博は開館しましたが、直前の10月、守屋毅氏が愛媛大学から民博に異動してこられました。芸能史研究で知られる守屋氏はかねてより高取先生とは懇意の間柄でした。その守屋氏と韓国の民族音楽を専門とする櫻井哲男氏が中心となり高取先生を代表者とする共同研究の構想が生まれました。それは「東アジアの祭祀と芸能」（1978年度～1979年度）という館内だけの集まりで、わたしもメンバーに名を連ねました。最初の研究会で高取先生がみずから「神霊示現の音と演出」という報告をおこないました。隼人の吠声や天皇の警蹕^{けいひつ}を取りあげた興味深い内容でした。のちに録音テープを起こし、高取研究班の成果として刊行された本に収録することができました（梅棹忠夫監修、守屋毅編『祭は神々のパフォーマンス——芸能をめぐる日本と東アジア』力富書房、1987年）。2年間の共同研究のあいだに日本展示の拡張とリニューアルがおこなわれ、高取先生は「日本の祭と芸能」の大展示空間を担当した守屋氏とわたしに対し、「千里教のマングラが描けるかどうか、君たちの正念場だ」と共同研究の場で激励されました。また、先生の『神道の成立』（平凡社、1979年）が刊行され、不肖わたしにも謹呈本が届きました。その冒頭には何と堀先生の「日本文化の潜在意志としての神道」という論文が引用されているではありませんか。そして、どういう経緯か忘れましたが、『民族学研究』にその書評を書くよう依頼されたのです。高取先生がその書評を非常に喜んでおられたことは守屋氏に直接伝えられたようで、わたしは何年も経ってから『神々のパフォーマンス』の「あとがき」（守屋）で知った次第です。

『民族学研究』の書評が出て数ヵ月後、先生とわたしは相次いで入院生活をおくることになりました。時期的にはわたしが先で、先生は少し遅れて入院されたと聞きましたが、翌1981年の正月、予期せぬ訃報にショックを受けました。

わたしはその頃、『日本民族文化大系』（小学館）で高取先生が責任編集をつとめる『神と仏——民俗宗教の諸相』という巻に「神社と神道」という章を書くことになっていたのです。わたしの入院は過労と風邪に起因するものでしたが、その原稿もストレスの一因であったことはまちがいありません。懸案の原稿は退院後、高取説をふまえながら「日本的土着主義の宗教体系」という視点から必死に書上げましたが、振り返ってみれば、それが先生に対する第一のレクイエムでした。編者は高取先生とも気脈の通じた歴史民俗学の宮田登先生となり、1983年に刊行されています。

他方、第2次高取班の共同研究「東アジアの民族芸能に関する比較（民俗学的）研究（1980

年度～1981 年度）も中途半端で終わらせるわけにはいかず，何としてもその成果を出すことが学恩に報いることだと思い，守屋氏ともども新たに共同研究「東アジアの民族芸能に関する比較研究」（1982 年度）を立ち上げたりして、『祭は神々のパフォーマンス』に結実させました。先生の没後，6 年もかかったことになりますが，これが第二のレクイエムです。

今回はわたしにとって第三のレクイエムにあたります。鎮魂になったかどうか分かりませんが，これでコメントを終わりにさせていただきます。